

# 桜花会 同窓会誌

---



ノーマルに戻りつつある本館前の風景

---

2022年10月

# 桜花会 同窓会誌 目次

■ 巻頭言			
	桜花会会長	西本 信	1
■ 異動教員から			
20年間ありがとうございました		桑田 繁樹	3
異動のご挨拶		井口 翔之	6
■ 新任教員挨拶			
		重田 翼	8
		小林 成	9
■ 卒業生から			
性格診断 (MBTI)		神田 英行	11
今後の抱負 ～学生時代の振り返りと交流会の感想を添えて～			
		本庄 悠朔	12
■ 追悼			
「我が人生の指南」辻二郎先生との思い出		山川 富雄	14
■ 最近の大学から			
近況について		田中 健	16
最近の学生・教員の課外活動		相馬 拓人	17
■ 桜花会賞受賞者の声			
	大井あすか (一杉・清水研究室)		20
	佐藤 悠 (田中健研究室)		21
	今井 恭祐 (田中克研究室)		22
	是石 和樹 (大友研究室)		23
	丸山 幸記 (原研究室)		23
	横地 康平 (山中研究室)		24
■ 桜花会企画のご案内			26
■ 会員の声			26
■ あとがき			27

## 巻頭言

桜花会会長 西本 信

桜花会会員の皆様、日頃より当会の活動にご理解とご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。令和3年度は、コロナ禍における度重なる行動制限という厳しい状況が続く中、桜花会の活動も制約を受けざるを得ませんでした。一方、会員並びに役員の皆様の協力、ご支援を頂戴し、オンラインでの活動が少しずつ軌道に乗り、徐々に活動が復活してまいりました。当初は慣れない中、何かとご不便をおかけすることも多々ございましたが、一つ一つ対応しながら、制約のある中では最大限の活動ができたのではないかと思います。ご協力いただきました皆様に改めて感謝を申し上げます。



さて、令和4年度の役員が決まりましたのでご報告申し上げます。会長には、昨年に引き続き西本信が就任することになりました。副会長は、岩倉具敦氏、田中健先生、村橋哲郎先生、横田乃里也氏、和田雄二先生、大友明先生の7名の皆様にご就任いただきます。会計監事は、高尾俊郎先生、清水亮太先生、常任幹事は、庶務担当に田中健先生、企画担当に田中克典先生、会計担当に伊藤繁和先生にご担当いただきます。よろしく申し上げます。また、各種行事遂行をご支援いただくサポーターの皆様にも引き続き宜しくお願い申し上げます。一方、長期間にわたり副会長を務められた田村吉隆氏、脇原将孝先生、並びに会計幹事の堤正也氏のご退任されました。ここに、その功績を称え心より感謝の意を表します。

次に、桜花会の活動状況についてご紹介いたします。5月21日、大岡山ホームカミングデイは予定どおり開催されました。行事の一環として予定しておりました桜花会総会と講演会はハイブリッドでの開催とさせていただきました。今年の講演会は、協和キリン株式会社、代表取締役副社長の大澤豊様より「バイオ医薬品について」という演題でご講演をいただきました。バイオ医薬事業全体の話から、詳細な技術内容、今後の方向性まで、幅広い内容のご講演でした。会場には多数の学生ならびにOBの皆様が参加され、時間が足りなくなるほどの活発な質疑がありました。また、毎年12月開催の「学生と卒業生との交流会」については、昨年度はオンラインでの開催とさせていただきました。開催前は、オンラインでのコミュニケーションは難しいのではないかと危惧しておりましたが、予想以上の盛り上がりを見せました。本年度は12月10日にロ

イヤルブルーホールでの開催を予定しており、現在、卒業生の在籍する企業の方々と調整中です。企業研究所見学会につきましては、昨年は中止となりましたが、本年度は三菱ケミカル様のご協力を頂き、同社の新研究棟を見学させていただき予定となっております。また、昨年度末の「卒業発表（学士特定課題プロジェクト）に対する桜花会賞授与」は計画通り実施、Zoomによる授与式も開催されました。卒業論文特別賞2名、卒業論文優秀賞4名に図書カードを授与させていただきました。

これらの事業につきましては、今年度は可能な限りリアルで開催したい所存でございます。その際にはどうぞよろしくお願い申し上げます。ただし、感染状況、国や自治体からの指示により、オンライン開催、延期や中止となる可能性もございますので、その点はあらかじめご承知おきいただきたく存じます。また、これらの活動を行うための費用は、会費に負うところが多く、会員の皆様のご協力に深く感謝いたします。継続的によろしくお願いいたします。

最後になりますが、東工大の組織が学院・系を中心とする組織に変更され、今後新組織からの卒業生が増えるため、応化系卒業生の枠組みをどの範囲にするかを昨年より役員並びに他の同窓会の皆様とも議論してまいりました。調整には今しばらく時間を要すると思っております。会員の皆様のご意見も頂ければと思っております。桜花会が有効な会であり続けるよう、皆様のご支援・ご協力を頂戴して進めて参ります。今後とも宜しくよろしくお願い申し上げます。

## 異動教員から

昨年度、および2022年6月に物質理工学院応用化学系から異動された桑田繁樹先生、および井口翔之先生から、東工大を去るにあたってのメッセージやご近況などをいただきました。教育研究にご尽力されてきた先生には心から感謝するとともに、新天地でのご活躍をお祈りしております。

### ■ ■ 20年間ありがとうございました

桑田 繁樹

(立命館大学生命科学部応用化学科)

この度、2022年3月末をもちまして東京工業大学を退職し、立命館大学生命科学部応用化学科に転出いたしました。2002年4月に東工大の理工学研究科応用化学専攻(当時)に着任してちょうど20年を大岡山で過ごしたことになります。この間、多くの教職員の方々、学生さんと出会い、教育研究に取り組むとともに課外活動?を楽しんだ日々の記憶は私にとってかけがえのない宝物です。なかでも研究室で長年ご一緒した碓屋隆雄先生、伊藤正人先生、榎木啓人先生には触媒化学、有機化学から日常のこまごまとしたことまで日々教えていただくこと、お世話になることばかりでした。また転出、研究室移設にあたっては応用化学系、応用化学フォーカスの先生方から、研究室学生の手続き面、資金面など様々な形でご支援をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

立命館大学には、金閣寺などの名刹もほど近い京都市内の衣笠キャンパス(主に文系学部)や、2015年に開設された大阪いばらきキャンパス(経営学部、政策科学部など)など複数のキャンパスがありますが、私が所属する生命科学部は、大半の理系学部とともに滋賀県草津市の「びわこ・くさつキャンパス」(BKC)に居を構えています。BKCでは2013年に日本化学会の春季年会が開催されましたので、訪れたことがある桜花会会員の方もいらっしゃるのではないでしょうか。入ってすぐのところにある、バス待機所・ロータリーを兼ねた広大なグラウンドが印象的なキャンパスです。新名神高速道路の草津田上ICや名神高速道路との合流点である草津ジャンクションが隣接しており、東名高速道路沿いのすずかけ台キャンパスとどこことなく似た雰囲気も感じます。ただ大岡山やすずかけ台とは違って、最寄り駅であるJR琵琶湖線の南草津駅からはバスで15分ほどと少々離れているのが泣き所です。南草津駅はBKCが開設された1994年に開業した比較的新しい駅ですが、京都駅まで電車で20分弱とアクセスもよく、近隣には立命館大学以外にパナソニックなど多数の会社、事

業所があるため、今や滋賀県 No.1 の乗降客を誇っています。一昨年と昨年はコロナ禍での遠隔講義やリモートワークの影響で隣の草津駅に再逆転されたようですが。朝晩には接続バスまで登場して大勢の学生を駅からキャンパスに送り込んでいます。ペーパードライバーの私も毎朝一緒に送り込まれています。

立命館大学への着任にあたって、東工大所属の D1、M2 の学生 4 名が BKC まで付いて来てくれたおかげで、大過なく研究室を立ち上げることができました。東工大ではラボのことは榎木先生にお任せばかりしてしていましたので、私一人でセットアップとなるときつと心が折れていたことでしょう。彼らには感謝しきれません。今は立命館大学の 4 回生（ご存知の通り関西では「年生」ではなく「回生」です。ちなみに「年生」と違って留年すると数字は容赦なく繰り上がり、最後は 5 回生や 6 回生となるというのをこちらに来て初めて知りました）と一緒に研究を進めてくれています。

立命館大学での夏学期の講義は対面講義でした。久しぶりの対面講義、それも履修者 140 名超ということで不安でしたが、この規模の講義には TA が付いて、IC カードリーダーによる学生の教室入退室履歴管理や課題成績入力などの補助をしてくれます。また配布資料の印刷や課題の返却も学びステーション（教務課のようなもの）にお願いできるなど、大人数講義への手厚いサポートがあるのは流石と感じました。とはいえ東工大の時のような、課題の返却時に学生さんの顔や名前を覚えたりコミュニケーションを取ったりという手はこの人数では困難です。大規模対面講義での評価の省力化だけでなくコミュニケーションやフィードバックにも、遠隔講義で身近になったデジタルツールが使えないかと思案しているところです。

思えば東工大在職中には東日本大震災やコロナ禍など、社会の様相を変えるような大きな出来事がありました。学生の気質や、大学教育に求められるものもこの 20 年間で随分と変わったように感じます。新天地でも東工大での経験を活かし、時代が変わっても通じるような教育研究をおこなっていきたいと考えております。

【別添写真】

(実験室にて。写真では見えませんが、奥に見える比良の山々の麓に琵琶湖も望めます。)



井口 翔之

(京都大学大学院工学研究科 産学共同講座特定講師)

2022年7月1日より、京都大学大学院工学研究科に産学共同講座特定講師として異動いたしました。2018年4月に山中研究室の助教として採用いただきから4年間3カ月の間、旧応用化学専攻の先生方、桜花会の皆様方に大変お世話になりました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

私が所属している産学共同講座は、京都大学大学院工学研究科分子工学専攻の田中(庸)・寺村研究室とS社が実施してきた二酸化炭素還元光触媒の研究開発を加速させるため、桂キャンパス(京都市西京区)内に設置されたものです(ご興味がある方は<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2022-07-01>をご覧ください)。桂キャンパスは、皆様が「京都大学」と聞いてイメージされる「時計台」がある吉田キャンパスからキャンパス連絡バスで45分ほどの位置にあり、工学研究科の多くの専攻が研究室を構えています。キャンパスに通う学生は、工学研究科に所属し、かつ研究室配属後のB4以上に限られるため、大学のキャンパスというよりは研究所に近い雰囲気かもしれません。学生実験などのために吉田キャンパスに向かうと、空気の違いにいつも驚かされます。桂キャンパスは、「西山」と呼ばれる京都市西京区、長岡京市、向日市、大山崎町にまたがる地域に含まれる丘の上にありますため、写真1にありますように、京都市内を見下ろすような位置にあり、景色もさることながら、夏の酷暑も若干は軽減されているのではないかと感じております(とは言え、本稿を執筆している8月3日は37度まで上がりました…)。

私は、修士課程と博士後期課程の5年間を桂キャンパスで過ごしました。田中庸裕先生、寺村謙太郎先生からご指導を賜り、これまで光触媒として認知されていなかった層状複水酸化物(LDH)を用いる水中でのCO<sub>2</sub>光還元を研究テーマとして、2016年3月に学位をいただきました。その時には、教員として桂キャンパスに戻ってくるなど想像もしていませんでしたが、6年が経過しても変わらぬ風景と雰囲気は、人見知り・場所見知りの私にとってはかなり大きい安心材料となっています。学位取得後は、産業技術総合研究所つくばセンターで2年間を過ごした後、2018年4月から山中研究室に参加させていただきました。大学院と産総研の7年間にわたって光触媒を研究していましたので、「山中研では光触媒をやらない」と覚悟を決めるまでには少し躊躇がありましたが、新たな気持ちで山中研に加入できたことは、今となってはとても良かったと感じています。山中研では、固体高分子電解質(SPE)を用いた電解反応による「ものづくり」に取り組み、CO<sub>2</sub>還元、O<sub>2</sub>還元、トルエン水素化、炭化



水素部分酸化，尿素水改質，エタノール改質といった様々な反応を，高速かつ高選択的に進行させるための電極触媒を開発しました．また，担持インジウム触媒を用いたメタン脱水素多量化反応について，必要となる反応温度の低温化（低温化といっても，900 度から 600 度への低温化なのですが，これが非常に難しい）にも取り組みました．山中研では，4 年間で約 40 名の学生さんと一緒に研究を進めました．触媒の右も左も分からなかった学生さんが，数年後には立派に巣立っていく過程に立ち会えたことを嬉しく思いますし，良い学生さんに恵まれたなど心から感じています（卒業生の皆さんへ：もし本稿を読んでいたら，ぜひ連絡をください．皆さんの卒業論文・修士論文・博士論文は私にとって宝物です）．また，助教として何も分からない状態で着任した私に対して温かい目で様々なことを教えて下さった，山中先生，綾田様，他研究室の先生方には，改めて深く感謝申し上げます．

京都大学では，カーボンニュートラルの実現に向けて，二酸化炭素を有効利用するための触媒技術の開発を推進していきたいと考えております．光触媒を用いた CO<sub>2</sub> 還元，電解による CO<sub>2</sub> 還元を実用化に一步でも近づけるためには，山中先生がいつも仰っていた「高速かつ高選択的」な反応を実現できる高度に設計された触媒が必要です．カーボンニュートラルの機運が高まっている今のうちに，一気に技術革新を加速させていきたいと思っており，その成果は，学会や論文等で皆様にご紹介できる機会があれば幸いです．また，京都にお越しの際には，桂キャンパスにも是非お立ち寄りください．

末筆ではございますが，皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます．



写真 1：桂キャンパスから京都市内の方向を望む．右中央に京都タワーが見える．

写真で見る京都大学より (<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/facilities/photo/list>)

## 新任教員挨拶

### ■ ■ 重田 翼 助教 (2022年4月着任)

2022年4月より、村橋 哲郎先生の研究室に助教として着任いたしました重田 翼 (おもだ つばさ)と申します。あまり見ない読み方の苗字だとは思いますが、覚えていただけますと幸いです。よろしく願いいたします。

私は大分県佐伯市の直川 (旧直川村)という所で生まれ育ちました。高校卒業後、2012年に九州大学理学部化学科に進学し、福岡市で4年過ごしました。大学院からは、東京大学理学系研究科化学専攻に進み、東京に移りました。そして、2021年3月に東大で博士号を取得後、そのまま東大で博士研究員を1年間務めてから、今に至ります。地元が、最寄りのコンビニまで約10 km、電車が1日3本しか走っていないという田舎でしたので、実家を離れてもう10年ほど経ちますが福岡や東京の都会な雰囲気には未だに慣れることができておりません。



私はこれまで、数個~数百個の金属原子からなる金属ナノクラスターに関する研究に従事してきております。金属ナノクラスターは、離散的な電子状態や5回対称性といった特徴的な構造をとるため、一般的なマクロな金属固体とは全く異なる物性・反応性を示し、新しい機能性物質の構成単位として高いポテンシャルを秘めています。私は、学部4年生の時は寺寄 亨先生の研究室で、物理化学的に金属ナノクラスターの性質を調べる研究を行ってまいりました。具体的には、真空中における気体分子との反応を、高感度質量分析と理論計算を駆使して調べました。これは、金属ナノクラスターそのものの反応性を、構成原子数一つ一つに着目して議論することのできる理想的な系です。しかしながら、当時の私は、どちらかというとも金属ナノクラスターを物質として合成することに興味を持っており、大学院から佃 達哉先生の研究室に進学いたしました。佃研究室では、無機コロイド化学のテクニックを応用した金属ナノクラスター研究に取り組みました。有機配位子で保護された金 (Au)クラスターを湿式で合成し、その構造・性質を、X線回折、X線吸収分光、電子顕微鏡観察などを用いて調べました。学部生の時とは毛色の異なる研究でしたが、幸いにも学位を取得することができ、そのまま佃研究室で博士研究員も務めさせていただきました。その後の進路について、少し分野を変えてみたいと考えていたところ、有機金属化学のプロ、かつ金属ナノクラスターの合成研究を行っている村橋 哲郎

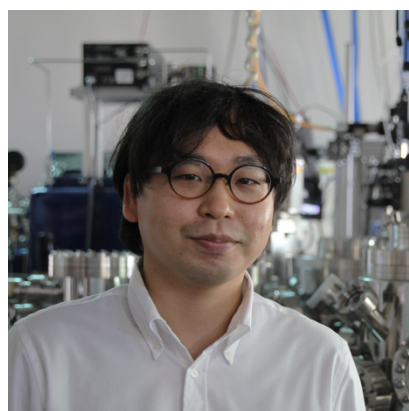
先生の研究室に採用させていただきました。

村橋研究室では、まず有機金属化学・錯体化学の知識や実験技術を吸収していきたいと考えております。そして、これまでに培った物理化学やコロイド化学の経験も活かして、新しいアプローチで金属ナノクラスターの研究を展開していきたいと考えております。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

#### ■ ■ 小林 成 助教 (2022年4月着任)

2022年4月1日より、一杉・清水研究室の助教として着任しました小林成(こばやし しげる)と申します。これからどうぞよろしくお願い申し上げます。

出身地は埼玉県比企郡の吉見町という片田舎です。2013年4月に東京工業大学第3類に入学し、その後化学工学科応用化学コースへと進学しました。学部4年次から一杉太郎先生の研究室に所属し、修士・博士後期課程でも引き続きご指導を賜りました。そして本年度より、物質理工学院応用化学系に採用して頂きました。



これまでの研究テーマとしては、全固体リチウム電池の高性能化に資する物質化学研究という大きな方向性の中で、「量子ビームを用いた電池内部のLiイオン・電子の輸送現象解明」や「機械学習やロボット技術を取り入れた新規リチウム電池材料の効率的合成探索」に取り組んできました。分析化学から物質合成まで、幅広く挑戦してきました。

人とのご縁とは不思議なものと感じます。一杉先生・清水先生が応用化学専攻に着任されたのが、私が学部3年の12月のことです。「研究室1期生だから、実験装置でもなんでもイチから自分で作れる！」というお話に惹かれて、テーマもよく知らないままに飛び込みました。実際に研究を始めてみると本当に何も無いところからのスタートでしたが、本を読んで理解するだけでなく得られた知識を具体的にものづくりへと活かす研究の過程は新鮮で、気づけば魅力に引き込まれていました。さらに研究を進めていく中で、先生方の幅広い人脈に支えられて国内外の様々な専門家の方々との共同研究を通して、自身の研究技術と人間性を磨く機会を頂きました。研究室配属のタイミングすらも巡り合わせで、少し時期が違えば異なるキャリアになっていたのではと思います。共同研究もお互いの技術やニーズやモチベーションが合致して初めて進められる貴重な機会です。

上記のような経験から、研究・教育環境の重要性を深く感じます。私ひとりで提案できる研究も、持ち出せる知識も限りがあります。だからこそ、学生と共に、柔軟なアイデアを実践し、高いモチベーションを発揮できるような環境づくりに取り組みたいと考えております。また、新たな巡り合わせを見落とさず、学生の研究・学習の機会として活かして行きたいと思います。世界規模の感染症蔓延やロシア侵攻など、国際情勢を否が応でも肌を感じる時代です。将来の歴史の教科書に残るような社会生活を一変させるような異常な事態も、当事者となると次第に慣れてしまいますが、研究のチャンスも教育の時間もまたとない機会なのだと受け止めて、日々過ごしたいと思います。

自分が学び育った応化で、後進の成長にできるのはなによりの喜びです。未熟者で至らぬ点多々あるかと思いますが、応化の研究・教育に貢献できるよう励む所存です。ご指導・ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

## 卒業生から

### ■ 性格診断 (MBTI)

神田 英行 (日本ゼオン株式会社)  
2012 年博士卒 (鈴木・高尾研究室)

この度は桜花会誌へ寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。私は東京工業大学を 2012 年 3 月に卒業し、合成ゴムや高機能樹脂の製造・販売・開発をメインとする日本ゼオン株式会社に入社しました。その中で、入社してからずっと透明プラスチック (高機能樹脂) の開発に携わっております。

今回、部署内で行った性格診断 (MBTI) において、東工大出身者で特徴があり、興味深かったのもので、それについて書かせていただこうと思います。まず、MBTI とは、個人がどう物事を認識し、決定を下すかについての心理学的な選好を示すことを目的としたもので、外向型・内向型、感覚型・直観型、思考型・感情型、判断型・認知型の 4 つの二分法を掛け合わせた 16 の性格類型に分類される自己申告型診断テストです。

ISTJ 2 人	ISFJ 0 人	INFJ 0 人	INTJ 3 人 (東工大出身)
ISTP 1 人 (東工大出身)	ISFP 3 人	INFP 3 人	INTP 0 人
ESTP 1 人	ESFP 0 人	ENFP 2 人	ENTP 2 人
ESTJ 1 人	ESFJ 0 人	ENFJ 2 人	ENTJ 1 人

部署のメンバー 21 名で実施し、東工大出身者 4 名中 3 名が INTJ (内向型、直観型、思考型、判断型) という型でした。私自身も INTJ でした。

この INTJ のタイプには、「独自のものの見方をもち、自分の考えを実現させたり、目標達成に高い関心を持つ。外で起きている出来事のパターンを素早く見出し、長期的な将来像を見出す。使命感をもって関与し臨んでいるときは、体系立てて課題を整理し、最後までやり遂げようとする。懐疑的かつ自律的であり、自分にも他社に対しても、能力や成果に高い水準を求める」という特徴がよく見られるそうです。また、説明が不十分であったり、批判的になりやすいなどの短所があるそうです。私自身、合っているなどと思う部分が多くありました。少し偏見が入っているかもしれませんが、このような特徴の人は、東工大生に多い傾向があるのではと思います。

また、このような診断は、自分を理解するだけでなく、タイプが違う人がいるということを知り、相手を理解する手助けになるという点でも有益です。例えば、外向型・内向型を指向する人の傾向として、外向型はとりあえず話す、内向型はとりあえず考えるという違いがあるそうです。私は一度頭の中で考えを整理してから話をする傾向が強く、内向型に当てはまると思います。これに対し、外向型の人に話を聞くと、話しながら考えを整理しているとのことでし

た。そのような人に対して私は、話の前後で矛盾していると感じることや現実的ではない意見が多いと感じることなどが多々ありました。今回、話しながら考えを整理しているということを知ることができ、相手を少し理解することができたと思います。

タイプの違いをいろいろ述べさせていただきましたが、MBTI は、適性を測定するものでなければ、能力を測定するものでもなく、どのタイプも同等の価値があり、優劣はありません。また、同じタイプでも、行動や表現の仕方や、能力の発達のさせ方は人それぞれであり、状況や経験にも大きく左右されます。あくまで傾向として理解することが大切です。このようなことを踏まえた上で、自己分析や他者への理解の手助けとして、皆さんも MBTI に限らず、このような性格診断を実施してみてもいいのではないでしょうか。新たな気づきがあるかもしれません。

最後に、ここ数年は COVID-19 の影響で、生活に様々な制約が発生し、私たちの日常生活に大きな変化が起きました。私の会社でも、TV 会議や在宅勤務などの普及によって、働き方が大きく変わりました。大学でも、オンライン授業や登校制限など、私の学生時代には想像もできなかった状況になっているのではないのでしょうか。このような状況が、できるだけ早く収束することを祈念し、結びとさせていただきます。

## ■ 今後の抱負 ～学生時代の振り返りと交流会の感想を添えて～

本庄 悠朔（凸版印刷株式会社）

2019 年修士卒（田中健研究室）

まず初めに授業の成績では大体 60 点ギリギリを叩き出していたような私に桜花会誌への寄稿のお話を頂きまして、大変光栄です。ありがとうございます。

学部時代を振り返ると、第一志望だった大学に入ったという嬉しさや、高等学校とは打って変わっての専門的な講義、東京での一人暮らしを始めるという環境の変化に圧倒され、学部 1 年の段階から「講義中にしっかり学び、復習する」という当たり前のことを確立できていなかったなあという後悔があります。結果、インプットが圧倒的に不足し、院試の勉強は大変苦労しました。しかし週 6、7 日で行っていた部活動や、大学よりも通ったゲームセンター、資格まで取得したプール監視員のアルバイトなど、全ての経験が今も自分の一部となっています。視野を広げてくれる貴重な時間でした。

学部 4 年と修士課程では、田中（健）研究室でロジウム触媒を用いた環化反応の開発に携わらせていただきました。優秀な先輩方や同期、後輩に劣等感を感じつつも自分で考えて自分で実験する毎日はとても楽しかったです。知識が

少なく実験の手も遅い私に対しても、辛抱強くご指導いただきました田中先生、当時助教だった柴田先生には大変感謝しております。会社に入ってもあの時教えていただいたことが今の私の基盤となっていることは間違いありません。NMR チャートとにらめっこした時間や卒業直前の基質適応範囲の追い込みが特に鮮明に思い出されます。

会社での仕事については、約半年間の工場実務経験を終えた後に研究所に配属となり、現在は生活・産業用資材関連の新商材の開発をしています。大学のような基礎研究とは異なり、コンバータとして製品の構成決定や工程設計、妥当性評価が主な業務です。特にシーズ型商材の開発に注力しており、要求仕様や評価方法まで自分たちで考える必要があるため、作製したサンプルで検証を繰り返しながら優れた性能を持つ製品の開発を進めています。パッケージ関連でも近年サステナビリティが重要視されており、脱アルミ化、モノマテリアル化、再生材の利用が進んでいます。

話は変わりますが今年の12月には、桜花会主催の「学生と卒業生との交流会」に参加させていただきました。私が学生の時にも参加させていただいた会ですが、今回は卒業生としての参加です。当日は会社に入ってから現在までの動きや仕事の紹介をさせて頂くとともに、懇親会の部では学生時代にお世話になった先生方や、博士課程に進学した同じ研究室の後輩、高い志を持つ在学生の皆様とお話をしました。学生さんからの鋭い質問に対するぶっちゃけトークも含めまして、大変有意義で楽しい時間を過ごすことができました。また私自身も卒業生の1人であることを誇りに思うと同時に、身が引き締まり、モチベーションが高まりました。オンライン開催ということで多少の不安もありましたが、トラブルもなく非常に円滑な進行をしていただきました。ご準備頂きました運営関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

高等学校の授業で化学に興味を持って応化に入り、大学で化学の世界を覗くことができたのは大変楽しく充実した時間でした。ただ、大学で有機化学を専攻している自分自身に多少の満足感を覚え、その本質を理解しようとする姿勢が足らなかったようにも思います。会社員になっても参考書を買って満足したり、英会話も続かない私ですが、それでも「やりたい、学びたい」という意欲は溢れております。これからも東工大で学んだことを自分の土台として、様々な分野に触れ、生涯にわたって知識の習得に努めることをこの場をお借りしてお約束いたします。そして、そのアウトプットとして、ブレイクスルーを作り出す新商材の開発に向けて精進して参ります。

最後になりますが、桜花会の益々のご発展と応化をご卒業された皆様の様々な分野でのご活躍をお祈り申し上げます。

## 追悼

### ■ ■ 「我が人生の指南」辻二郎先生との思い出

山川 富雄（日本ケミファ株式会社取締役常務執行役員）

1979 年修士卒（辻・山本研究室）



2021 年 12 月 17 日 伊豆稲取温泉銀水荘にて (写真提供：昭和 53 年度修士 安田英之)

本学栄誉教授辻二郎先生が、2022 年 4 月 1 日にご逝去された。偉大な有機合成化学者を又一人失った。そして先生の中で研究の楽しみ・苦しみ・温かみを味わい、そしてそれを糧に大きく成長した全ての卒業生にとっては人生の柱を失った感がある。

先生は 1974 年、東京工業大学工学部教授の任に就き、パラジウムケミストリーの研究を精力的に展開され、1988 年定年退官された。先生のパラジウムを用いた有機合成化学の業績は他の追悼文にゆだね、先生とその卒業生との思い出話をしたいと思う。東工大退官後、卒業生の萬代忠勝先生の紹介で岡山理科大学及び倉敷芸術科学大学で研究を続けられた。その頃、私はパラジウム触媒でうまくいかない反応があったため、辻先生と萬代先生に教えを乞うため岡山理科大を訪問した際、丁度バブル時代の全盛期であったためか、研究室でパラジウムの触媒反応メカニズムの議論と同じように株価のメカニズムについて情熱的に議論され、私の話を聞いてくれたのはわずか 10 分ほどだった。その後バブルが弾けた後は株の話が全く聞こえてこなくなった。

一方、同時期にノーベル化学賞を受賞された鈴木章先生も両大学に在籍されたことはパラジウム科学にとって奇遇と思われる。両先生ともノーベル賞候補と言われていただけに、2010 年鈴木先生がノーベル化学賞を受賞された時、招聘した萬代先生の心境は複雑極まりないものとなっていたようだ。

私が大学 2 年で先生の授業を初めて受けた時、企業から来られた先生ならではの産業に根付いた有機合成化学を教えていただいた。それがきっかけで辻研



研究室に入り、有機合成の楽しさ・奥深さ・可能性の広がりなど研究室時代の 3 年間は自分の人生にとってかけがえのないものとなった。先生なくして自分の人生は無いと思えた。卒業後も辻研究室の同窓会の幹事を務めさせていただき、先生と接する機会をなるべく多く持つようにした。

耳は遠くなされたものの、身体は健康そのものであり、2014 年の米寿を祝う会の時には「次は白寿までがんばるよ」と明るくお話され、その後も横浜中華街や先生のご自宅で毎年一回は卒業年代の近い卒業生が集まり楽しいお酒と会話を楽しまれていた。特に赤ワインがお好きで、お土産に持っていくと「夜寝る前に飲むのが楽しみ」と安いワインでもいつもにこにここと受け取られた。

写真は昨年 12 月に卒業生 7 名と先生で伊豆稲取銀水荘に行った時のものである。その時もととても明るく元気に海外旅行の楽しかった話をされていただけに、その 3 か月半後の 4 月 2 日に長女篤子さんよりお電話を頂き、一瞬何を言っているのかわからなくなるほどのショックをうけた。

もうあの無邪気な笑顔と我々に対する心のこもった会話が聞けないと思うと昔の記憶だけが自然に蘇る。

辻二郎先生のご冥福をお祈りいたします。

## 最近の大学から

### ■ 近況について

桜花会常任幹事（庶務担当） 田中 健

今年度、桜花会庶務幹事を務めます田中健と申します。昨年度は、応用化学系主任を務めておりました。東工大応用化学専攻に2014年4月に着任し、早いものでもう9年目となりました。これからも、応用化学ならびに桜花会の発展に尽力していきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。以下に旧応用化学専攻と応用化学系の今年度の状況をお知らせいたします。

入学時に学部と学科を選択するシステムから、学部と大学院が統一された「学院」に入学する大きな改革が実施されて数年が経過し、教員・学生共に教育改革が浸透してきたと実感しております。この教育改革により、1年生で物質理工学院に入学したあとで、2年生進級時に「系」、3年生進級時に「フォーカス」に配属されるようになりました。「系」は「応用化学系」と「材料系」から選択しますが、入学時の学院と異なる学院の「系」に移動できる転系の上限が定員の5%から10%に引き上げられ、進路選択の自由度が大幅に増すことになりました。

学生の進路選択の自由度が増すのは良いことなのですが、弊害もあることを気付かされる結果となりました。最近の情報科学人気からか、入学時の学院と異なる学院の「系」に移動可能なこの制度を利用して、情報理工学院の「系」などへの移動を希望する学生が増えています。入試時の情報理工学院の偏差値の高さも相まって、そのような傾向に拍車がかかっているようです。しかし、情報科学の人気が高まっているだけでなく、化学系の人気が低下していることも原因の一つです。我々教員に化学の魅力伝える努力が欠けていたのではないかと考えており、学部1年生向けに夏休み研究室体験行事などを企画し、情報発信と人気回復に努めております。

来年度からは学部の「カリキュラム」と「フォーカス」を見直し、2年生で「共通科目」を学び、3年生で3つの分野「分子創成」「機能物性」「化学システム」を選択する方法に変更になります。有機・無機・物化・高分子・化工・(共通)に履修科目を分類し、各群の科目数をほぼ揃えることで、「広く化学と工学を学べる系」を学生にアピールできればと考えております。また、これまで各フォーカスでバラバラであった科目体系が、学生が理解しやすい「系」として統一された科目体系に再編されます。この学部カリキュラム改革により、応用化学の人気が復活してくれることを切に願っております。

また、夏休み明けの第3クォーターからは、ほぼすべての講義が対面実施と

なります。私の講義科目は第2クォーターにおいても対面実施となっておりましたが、昨年までのオンライン講義よりも大幅に学生の理解度が上がってまいりました。やはり学生の反応を見ながら講義ができるのはお互いにメリットが大きく、実際に期末試験の成績も大幅に向上しました。数名の学生に意見を聞いてみたところ、対面の方が眠くならなくていいです（笑）とか、わかりやすかったというポジティブな反応が多く聞かれ、コロナ禍の異常な世界から平常へとこのまま回帰してくれることを期待しております。

最後に、この1年間の人事異動について紹介します。村橋研究室の助教として重田翼先生が、一杉・清水研の助教として小林成先生が本年4月に着任されました。本専攻の教育・研究におけるご活躍と、専攻運営へのご貢献を大いに期待しております。また、桑田繁樹准教授が立命館大学教授にご栄転されました。さらに、山中研究室の井口翔之助教が京都大学特定講師に、村橋研究室の山本浩二助教が防衛大学校助教にそれぞれご異動されました。桑田先生、山本先生、井口先生は長きにわたり応用化学専攻・応用化学系に多大なご貢献をされ、旧応用化学専攻構成員全員から心からの感謝をお伝えしたいと存じます。

末筆になりますが、皆様のご活躍とご多幸をお祈り申し上げますとともに、今後も桜花会へのご支援・ご激励をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## ■ 最近の学生・教員の課外活動

### 相馬 拓人（応用化学系 大友研究室 助教）

皆様は東工大の学祭，“工大祭”は3年連続で現地開催が中止になっていることをご存知でしょうか？コロナウイルス流行による問題で2021年はライブ配信のみによる開催、2020年は中止になってしまいました。更に極めて不運なことに、2019年は台風19号の影響で中止になりました。これは極めて由々しきことで、本学はいま在籍する学生の相当な人数が工大祭の経験がないという異常な事態になっているのです。いわゆる課外活動は講義，研究などと並んで欠かすことのできない学生時代の大事な経験でもあります。その他部活動・サークル活動も大きな影響を受けており，学内のグラウンド使用から合宿，公的な大会まで多大なる影響を受けたのは皆さんが存じ上げている事だと思います。

しかしながら今年度では比較的そのような課外活動が緩和傾向になり，学内に活気が戻りつつあります。最近の感染者数の増加はまだまだ予断を許さない状況であることを再認識させますが，本稿では，コロナ禍の話ばかり...という風潮に対して最近の課外活動について紹介し少しでも明るい話題提供をしたいと思います。実際に，今年度は工大祭が現地開催される予定であり，10/29(土)，30(日)に予定されています（この記事が出る頃には工大祭の熱気が高まって

いる頃と推察しております)。

ここで学生のみではなく”教員の”課外活動というタイトルにしたのには理由があります。工大祭の主役は学生であると言わざるを得ませんが、教員も多大に関わっております。研究室公開や特別公開講義（最近では応化の一杉太郎 特任教授や田中健 教授なども担当され一般向けの分かりやすい講義を行った！）などは有名ですが、教員が顧問を務めていたり OB として活動に参加しているケースもあります。筆者は 2019 年 10 月に助教として着任したのですが、唯一の私の応化の”同期”が同じタイミングで着任されました田中克典教授であり、なんと偶然なことにお互いにギターを演奏するという共通の趣味がありました。更に面白いことに、田中克典教授は今年度より東工大ロック研究会の顧問を務められております。こういった特殊な縁から、最近では田中克典教授やロック研究会の学生達とも繋がりができました（写真 1, 共通の



写真 1 ロック研究会の部室にて左から田中克典教授・部長で3年生の土谷君・筆者。

趣味の話をし出すと全員無邪気に話すので世代を超えてすぐ仲良くなる！)。実際に田中克典研究室 HP では研究内容よりも前に（笑）ギターの演奏動画が掲載されており、中学生からギター演奏を趣味としている筆者から見てもその腕前は疑うべくもなくプロ級です。化学ではなくギターを教えて欲しいくらいです（冗談です）。しかも、今年の工大祭では田中克典教授は 10/29（土）に公開講義に加えてロック研究会 OB の大学院生や理研の研究者と共にステージでの演奏も予定されているので、お時間ある方は見に行つてはいかがでしょうか。

ちなみに我々の趣味であるエレクトリックギターは磁性元素を含んだ弦を振動させ、その振動をコイルの電磁誘導を応用することで電気信号として検出し、その信号をトランジスタ（または真空管）で増幅しアンプから大音量として出力するような楽器です。その音波の周波数依存性を眺めるとオシロスコープでの実験や Fourier 変換を髣髴とさせます。プロのギタリストは機材に大金を投じますが、本質的には音波の周波数依存性や時間依存性を好みの形状に変調しているだけです。また弦には通常は Ni 合金が使用されていますが、最近では Co に置換し磁気特性を最適化した弦も人気があります。これらも半分冗談のような話ですが、化学・元素や電子材料の知識はこの世の原理・原則に近い学問であるため、音楽など他分野ましてや趣味でも常に活きるのです！

最近立ち入り禁止が解除された本館前ウッドデッキの静けさ（写真 2）は悲しさがまだまだ残りますが，このような明るい話題や楽しい雰囲気徐徐に取り戻されつつあることに深い喜びを感じます。アインシュタインはヴァイオリン演奏技術に長けていたことでも有名であり，マックス・プランク（プランク定数  $h!$ ）によるピアノ演奏との重奏を行った逸話さえ残ります。ぜひ皆さんもこのような状況下だからこそ趣味も忘れず大切に，英気を養い健康・文化的な生活を営みながら良い勉学・良い仕事を実現していきましょう。



**写真 2** 静かな本館前ウッドデッキ。  
以前は常に課外活動を行う学生等で賑わっていた。

## 桜花会賞受賞者の声

桜花会では、これまで、優秀な卒業論文発表者を表彰してまいりました。制度改革後は、毎年2月に行われる学士特定課題研究プロジェクト発表会において、優秀な研究発表を行った学生について、助教の先生方の厳正なる審査の上で、桜花会賞および桜花特別賞を認定しております。以下は、令和4年2月の桜花会賞受賞者に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

### ◆大井 あすか（一杉・清水研究室）

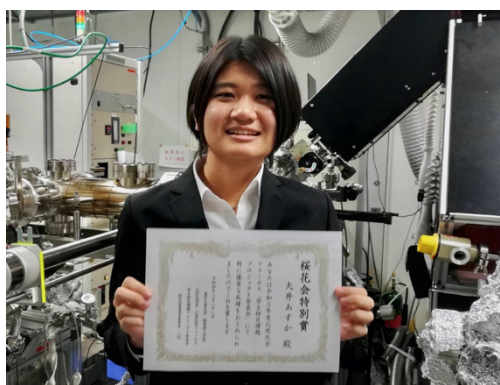
この度は、桜花会特別賞という栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。このような賞をいただくことができたのも、一杉先生、清水先生をはじめとした先生方、日々の実験を支えていただきました先輩方、同期の皆様のおかげです。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

研究室に配属してからの一年間は、とても充実した日々でした。配属直後はこれまでの勉強から一転、未知の学問領域を探究する研究を行う新しい環境に戸惑うばかりでした。そのような中、一杉先生が度々おっしゃられていた「一年後には『世界でまだ誰もやっていないこと』をできるようになる」というお言葉はとても印象的でした。そのような壮大なことを自分もやってみたいという期待と、自分には難しいのではないかという不安の入り混じる気持ちでいっぱいであったことを今でも覚えております。

いざ始まった研究では、覚えるべき知識や実験操作の量に驚かされました。膨大な知識や操作をすべて習得できるのか、その上で『世界でまだ誰もやっていないこと』をできるのか、先の見えない今後に不安や焦りが募っていきました。

しかし、研究を進めていくと次第に不安は払拭され、研究の楽しさを実感できるようになっていきました。予想通りの実験結果が出た時の喜びはもちろんのこと、結果が予想外であった時の興味深さは計り知れないものでした。学生実験とは異なり、研究では予想外の結果にこそ面白さがあり、そこから次々と新たな研究が発展していくさまを実感できたことは、これまでに得ることができなかった貴重な経験です。

まだまだ未熟ではありますが、この一年間で様々なことを学び、経験を積むことができました。この経験を糧に、今後もより一層研究に励んでいく所存で



す。

最後になりますが、研究環境を整え、厚くご支援いただきました一杉先生、清水先生、中山先生、研究テーマの設定から日々の実験、発表練習に至るまで親身にご指導いただきました西尾先生、枝村さんや武田さんをはじめとした先輩方、そして同期の皆様に重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### ◆佐藤 悠（田中健研究室）

この度は桜花会特別賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に思っております。一年間ご指導いただいた田中先生および永島先生、実験操作から結果の解析まで数多くを教えてくださいました師匠の折木さんをはじめとする研究室の先輩方、日々高め合い時には一息ついて話をした同期の方々に心より感謝申し上げます。

私は大学入学当初から有機化学に興味があり、特に種々の巧妙な反応を用い、幾何的に美しい分子を合成することに魅力を感じていました。研究室を選ぶとなった際には、アルキンからのベンゼン環構築による複雑な化合物合成に魅せられ、田中健研究室に飛び込みました。

実験には失敗がつきもので、研究を始めると早速、反応検討に用いる化合物が合成できないという壁にぶつかりました。先の見えない日々ではありましたが、先輩にアドバイスをいただきつつ条件を変えての再トライを繰り返し、ついに8度目にしてようやく中程度の収率で目的物を得ることに成功しました。失敗が続いたときは非常にもどかしく感じましたが、その分成功したときの喜びは大きなものでした。続いて、早速できた化合物の反応性を調べると、自身の想像していなかった稀有な反応を進行させることがわかりました。その反応は当初、自身にとっては副反応の1つにすぎませんでした。先生や先輩の助言により非常に興味深いものと気づくことができました。



さらに、田中先生にご提案いただきこの反応を立体的な分子の合成に用いたところ、非常にユニークな構造の分子ができるとわかりました。今にして思えば無謀ともいえる挑戦でしたが、知識が少ない B4 であるがゆえに臆せず挑めたものとも思います。後になって先輩から「正直合成は上手くないかと思っていた」と伺い、してやったりとほくそ笑んだことを覚えています。研究を進めていくとさらに様々な形の分子が作れるとわかり、苦労も忘れられるエキサイティングな研究になりつつあると自負しています。全体を通じて、当初の思

惑に囚われない研究であり、実験結果を注意深く吟味すること、可能性があれば迷わず挑戦していくことの重要性を教えられました。

研究室所属から1年が経ち、右も左も分からなかった初期とは異なって、現在はだいぶ色々なものが見えるようになってきたように思います。まだまだ先生方、先輩方の力をお借りして研究を進めている状態ではありますが、実験により仮説を検証し新たなものを生み出す研究の面白さは少しずつ分かってきました。今回の受賞を糧に、お世話になっている多くの方々に報いることが出来るよう、そして化学の発展の礎を築けるよう、誠心誠意努めて研究を推し進めていきたいと思えます。

#### ◆今井 恭祐（田中克研究室）

この度は桜花会優秀賞という荣誉ある賞をいただき、大変光栄に存じています。この度、このような賞を頂くことができたのは、指導教員である田中先生とアンバラ先生はもちろん、実験を主に指導して頂いた研究員の六車さん、マウスを使った実験を手伝って頂いた理化学研究所の中村さんと草刈さん、研究について相談に乗って頂いた研究室の先輩方や同期といった多くの方々のおかげであると感じています。この場を借りて、心から感謝を申し上げます。

振り返るとこの1年間は周りの方々に助けられることが多い日々であったと感じます。研究室に所属した当初は、実験、授業、勉強会などやること多い研究室での生活に慣れずに苦勞しました。また、私の研究テーマは基本的には化合物を合成し、それをマウスに投与するという流れで進めていくため、有機合成だけでなく細胞やマウスの取り扱いについても覚える必要がありました。しかし、そのような状況でも研究室の先輩方や先生の丁寧なご指導をして頂いた



のおかげで実験を進めていけました。実験で成果を出すことがその恩義に報いることであると信じて努力してきたため、発表会直前に追い求めていたデータが取れた時は、とても嬉しかったのを覚えています。

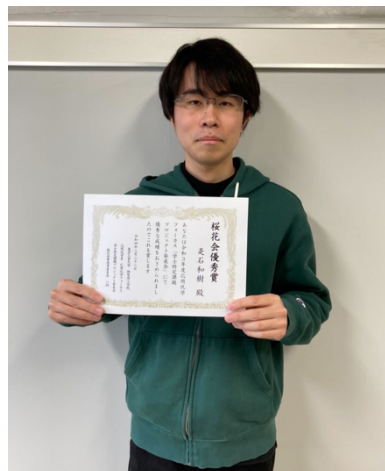
1年間で多くのことを学ばせて頂きましたが、まだまだ未熟であると感じています。今回の受賞を励みにして一層精進していきたいと思えます。最後になりましたが、今回のような発表の機会を設けていただいた桜花会の皆様、先生方に深く感謝いたします。



◆是石 和樹（大友研究室）

桜花会優秀賞に選出していただき、たいへん嬉しく思います。大友先生、相馬先生にはテーマの決定から日々の実験、発表練習に至るまで丁寧なご指導を賜り、感謝の念に堪えません。また先輩方や同期の面々には、技術的な面でも気持ちの面でもたいへんお世話になりました。そして生活全般を支えてもらった両親にも、深く感謝申し上げます。

卒業研究では、酸化ガリウムという物質を対象にしていました。大友研では長年この物質に関係した研究が行われています。余談ですが、一昨年とその前の大友研からの桜花会賞受賞者も酸化ガリウム関連の研究でしたので、何か縁があるのかもしれませんが。そんな輝かしい先輩方の活躍がある中で私に任されたのは、数%の変化を制御したり検出したりする必要があるという点で繊細さが求められる研究テーマでした。



この一年間を振り返ってみると、うっかりミスや思い込みから来る勘違いで試料と時間を無駄にしたり、実験結果が本当に自分の解釈通りなのか、本当に数%の変化が現れているのかと不安になったりと、順風満帆ではなかったように思います。それでも気持ちを切り替えて地道に実験を重ねていくことで、段々と法則性が見えてきて、現象を説明できるようになっていきました。それは視界の靄が晴れていくような感覚があり、私にとって大きな刺激になりました。

発表会ではいかに緊張せず、自信をもって発表できるかが自分にとっては一番の課題でしたが、発表練習の際に先生方から、そんなに緊張しなくてもいいと助言をいただき、あまつさえ発表中に一つギャグを挟むようにとまで注文を受けていたので、緊張しすぎずに発表することができました。私は生真面目な性格なので面白いことを言って期待に応えられなかったのが唯一心残りです。

現在は、修士課程に進学して引き続き大友研で研究を行っています。研究をより良いものにできるよう、そして頼もしい先輩となれるよう、日々邁進して参ります。

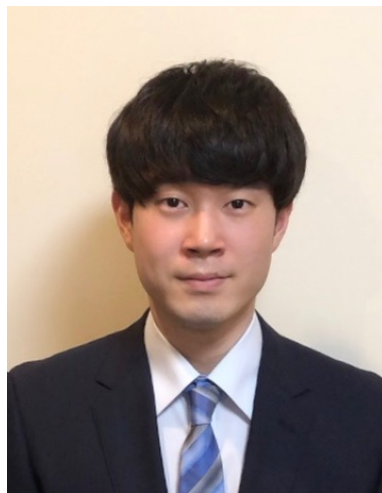
最後に、今回このような賞をいただけたことが、自分の中でとても励みになりました。評価してくださった応化フォーカス教員の方々にも、深く感謝申し上げます。

◆丸山 幸記（原研究室）

この度は桜花会優秀賞を受賞することができ、大変光栄に思っております。今回このような栄誉ある賞を受賞できたのはひとえに原先生や石川先生、先輩

方のご助力のおかげだと深く感じております。原先生、石川先生には実験に関しての助言のみならず、研究者としての姿勢や、説得力のある発表の手法など、私の研究活動に必要なすべてのことを教えていただきました。また先輩方に関しまして、不慣れであった私に優しく基本的なことを教えてくださいました。この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

現在、私は生命理工学院の大窪先生の研究室に所属し、エキソヌクレアーゼを用いた二本鎖 DNA のダングリング形成というテーマで研究を行なっております。これはゲノムサイズの DNA 合成のスキームの途中に位置する研究であり、研究室全体ではこのゲノムサイズの DNA の化学合成を目指しております。昨年度の研究では DNA を金ナノ粒子の担体、いわば材料として用いており、今年度では合成というまた違った面から DNA の性質を捉えることが非常に面白いと感じております。また、主に自分ひとりで研究が進められていた昨年度とは異なり、今年度は大きな目的の中の 1 つのテーマという形で研究を進めているので、今後は同期や先輩方、後輩と協力しながらより一層研究に励みたいと考えております。



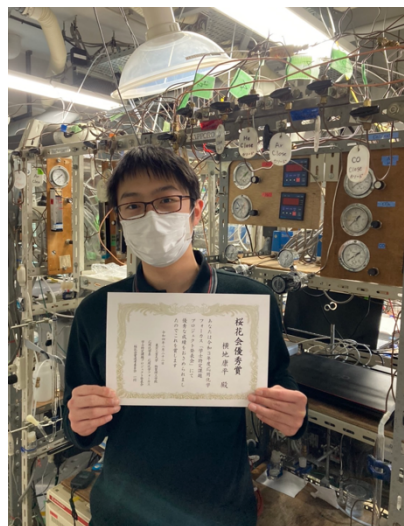
終わりに、私の研究生活を支えてくださった原先生、石川先生、および原研究室の皆様、そして家族に心より御礼申し上げます。また、修士課程から所属した私を快く受け入れてくださった大窪先生、大窪研究室の皆様方にも心より感謝を申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。

#### ◆横地 康平（山中研究室）

この度は桜花会優秀賞を受賞することができ、大変光栄に思っております。今回このような栄誉ある賞を受賞できたのは、熱心に指導してくださった山中先生、井口先生、先輩方のお力添えがあつてこそだと感じております。山中先生、井口先生には実験の助言のみならず、研究者としての心構えや、伝わりやすい発表の手法までご指導いただきました。先輩、同期の方々には右も左もわからなかった私に楽しく、優しく指導していただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

昨年度から蔓延した新型コロナウイルスの影響により、私たちの生活には様々な制限が今もなお続いています。まだ、収束の兆しは見えていませんが、今年は自粛要請がなく、幸運にも大きな不自由なく研究に励むことができました。私の研究テーマは二酸化炭素を電気化学的に還元し炭化水素を合成するというものです。再生可能エネルギー由来の電力を用いて二酸化炭素を炭化水素

に還元し，循環利用することでカーボンニュートラルの実現を目的としています．現在，異常気象や様々な問題を引き起こす地球温暖化の一日でも早い抑制，解決が求められています．私はこの問題に興味をもち常日頃から節電を心がけていたので，直接この問題に関わる研究をできることが非常に嬉しく，やりがいを感じております．今年1年間では炭化水素生成の活性を大きく向上させることができなかったため，修士に進学したらますます研究に励みたいと思います．最後になりますが，研究生活を支えてくれた家族と山中先生，井口先生，および研究室の皆様方に心より御礼申し上げます．今後ともよろしく願いいたします．



## 桜花会企画のご案内

本年度の桜花会総会は、東工大ホームカミングデイ(5月21日)に実施させていただきました。「学生と卒業生の交流会」は、本年度は東工大蔵前会館ロイヤルブルーホールで開催いたします。なお、今後の企画の詳細につきましては桜花会ホームページに掲載いたしますのでご覧ください。

### ★★★企業見学会★★★

日時 11月2日(水)

場所 三菱ケミカル株式会社 Science & Innovation Center

### ★★★学生と卒業生の交流会★★★

日時 12月10日(土) 13:00～18:40

場所 東京工業大学 東工大蔵前会館ロイヤルブルーホール

### ★★★卒業祝賀会★★★

日時 令和5年3月27日(月) 予定

詳細は後日桜花会ホームページ、電子メールなどのご案内いたします。

## 会員の声

桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その払込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方がいらっしゃいます。

ここでいくつかのメッセージをご紹介しますと思います。

星野 昭成 (S42学部) サッカーチームは群馬への転居に伴い、群馬に変えて、県内75歳以上のリーグ戦に参加しています。	永原 肇 (S53修士) 西本会長御苦勞様です。私は昨年旭化成を退社し、別会社にて社外取締役をしています。
谷口 功 (S50博士) 熊本-東京を行き来しながら元気でやっています。	尾関 道生 (S34学部) 昭和12年1月7日生まれ。何とか生きています。

後藤 誠 (S60学部) 定年後、縁あってITER計画（“地上の太陽”核融合実験炉の建設）に従事することとなりました。2025年の稼働を目指します。	岸本 史直 (H30博士) 今年度より東京大学化学システム工学専攻の助教に着任いたしました。固体触媒研究をしております。
伊藤 卓 (S39修士) 大岡山キャンパスの正門からの景観の変貌に呆然としております。	山崎 升 (S20論博) 東工大名誉教授
齋藤 正巳 (S41修士) くらりか静岡理科教室で社会奉仕しています。	田村 吉隆 (S42学部) 10月より長男家族と同じ屋根の下で暮らし始めました。
栗山 伸一 (S54学部) 大学院が長津田であったことが縁で、現在は再生医療ベンチャーで最期の力をふり絞っています。	

## —あとがき—

新型コロナウイルス「オミクロン株」によって新規感染者激増となった今夏でしたが、一方では学会がほぼいつもの様式で再開されるようになりました。つい最近、東工大では日本物理学会でしたが、やはり対面形式だと情報のやりとりが“密”になっているようで楽しそうでした。それにしても、物理学会は雰囲気（服装）が自由で良いです。

海外への行き来もかなりやりやすくなってきました。渡航先にもよりますが、ワクチン接種済であれば帰国前 PCR 検査が不要になったのは、本当に嬉しい。私は7月に海外に渡航しましたが、帰国前 PCR 検査のプレッシャーで落ち着かない日々を向こうで過ごしていました。幸いにも陰性でしたが、これからはそんな心配をしなくて済みそうです。用心を怠らず、ノーマルへの回帰を進めたいものです。

本年4月に辻二郎先生がご逝去されました。お礼を直接伝える機会を逸したのが心残りですが、辻先生の著書にとっても励まされました。

ご冥福をお祈り申し上げます (SI)。

令和4年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-S1-9

東京工業大学 物質理工学院 応用化学系 田中 健

電話 03-5734-2120

E-mail: [cherry@apc.titech.ac.jp](mailto:cherry@apc.titech.ac.jp)

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>